

る。

【結果】

8 東病棟入院患者148名に検査実施，9名(6.1%)に便からBacillus cereusを検出した。

Bacillus cereus 検出患者の入院部屋のトイレ環境培養を実施したが，Bacillus cereusの検出はなかった。

【考察】

8 東入院の患者の便にBacillus cereus 保菌はあるが，トイレ環境からBacillus cereusの検出はなく，トイレ環境を介した感染経路は考えにくい。

6. 当科で管理したCOVID-19母体から出生した児のまとめ

小児科

黒川 大輔	内藤 沙苗
酒井 善紀	中島 薫
山本 結子	上杉 裕紀
岡田 怜	加古 優香
栗林 睦子	白井 佳祐
藤澤 開	坂田 千恵
中迫 正祥	福嶋 祥代
神吉 直宙	阪田 美穂
中川 卓	高見 勇一
柄川 剛	五百蔵智明
久呉 真章	

総合周産期母子医療センターである当院はCOVID-19母体を積極的に受け入れており，対応について検討した。

分娩方法は基本的に帝王切開とし，生後は陰圧個室で管理した。ウイルス検査は鼻咽頭ぬぐい液を採取しLAMP法もしくはPCR法を用いた。生直後と生後24時間もしくは48時間の2回にウイルス検査とともに陰性であれば個室隔離解除とした。

実際に2021年4月から9月にCOVID-19母体から出生した児は15名であり，在胎週数と出生体重の中央値は35 (25~39) 週，2410 (737~3337) gであった。帝王切開が14名，経膈分

娩が1名であった。児のウイルス検査は1名が陽性であったが無症状であった。他1名が偽陽性，13名は陰性であった。肺炎や敗血症などの感染症は認めず，全例呼吸補助なしで退院した。多職種にわたる入念な準備をおこなうことで，迅速で適切な対応が可能であった。

7. 臨床所見に先行して自動瞳孔記録計によるNeurological Pupil Index (NPi) が異常をきたした脳出血2症例

麻酔科

岡崎結里子	山岡 正和
南 絵里子	松本 直久
山下 千明	小野 大輔
岡部 大輔	小橋 真司
西村 健吾	石川 慎一
八井田 豊	倉迫 敏明
大森 睦子	

【背景】

Neurological Pupil Index (NPi) は自動瞳孔記録計 (NPi-200[®]) による対光反射の定量的計測に基づき算出される指標であり，神経学的異常の早期かつ客観的な評価が期待される。今回，頭蓋内出血患者においてNPiが臨床所見に先行して異常値を示し，治療方針決定の一助となった2症例を経験した。

【症例】

①50代男性。左被殻出血によりICUに入室した。入室9日目に瞳孔不同が出現したため，頭部CTを撮影した。CTにて脳浮腫とmidline shiftの進行を認め，緊急開頭血腫除去術を施行した。NPiは瞳孔不同が出現する数時間前に左右差を示していた。②50代男性。意識障害を伴う左尾状核出血によりICUに入室した。入室5時間後にNPiが左右ともに0となったため，頭部CTを撮影した。CTにて脳室の軽度拡大と意識・呼吸状態の悪化を認め，緊急内視鏡下血腫除去術を施行した。

【結語】

自動瞳孔記録計によるNPi測定は，頭蓋内病

変患者の病態進行の早期発見に有用な可能性がある。

8. 院内がん登録データを利用したコロナ禍におけるがん患者受診状況の分析

がん診療連携課がん登録係

安東 正子 春井 直子
井上 豊子

2020年症例の院内がん登録件数は2,506件、2019年と比べ82件の減少となった。

コロナ禍において、がん患者の受診状況に変化が起きているのかを統計分析した結果を報告する。

整形外科部長より、骨転移での受診者が2020年に入り急増したため、前年と比較した統計の依頼があった。臨床病期で骨転移のあった件数は、2019年50件、2020年79件と増加していた。そこで、がんと診断時、すでにstage IVの患者が増加したと推測、2019年414件17.3%、2020年432件19.1%（脳腫瘍、白血病、その他の造血器腫瘍を除く）であったが、診断のみで精査せず、積極的治療なしとして他院へ紹介した件数が、2019年と2020年で2倍増となったことがわかった。

当院は、感染症病床で中等症患者を受け入れながら、コロナ禍であっても平時のごとく診療を実施する方針を貫いてきたため、がん患者数は大きく減少しなかったと考える。

引き続き、2021年の統計についても、がん治療に影響を及ぼす結果となるのか院内がん登録を実施しながら統計分析を試みたい。

9. 当院における COVID-19妊婦への対応

産婦人科

大前 彩乃 小高 晃嗣
西田 康平 相本 法慧
平田 智子 西條 昌之
西田 友美 河合 清日
中山 朋子 関 典子
水谷 靖司

2019年後半からSARS-CoV-2と名付けられた新型コロナウイルスが世界中に広がり、COVID-19パンデミックを引き起こした。周産期領域でもその影響は多大にあり、当院での自験例を交えて報告する。当院では2020年7月から2021年11月までの間に39名のCOVID-19妊婦の入院受け入れを行った。そのうち治療を要したものは19名、陽性期間中に出産となったものは15名であった。出産15名のうち帝王切開は14例で、その要因としては前期破水や骨盤位などの産科的適応が3例、COVID-19肺炎による母体状態増悪が3例、無症状だが二次感染回避のため施行したものが8例であった。当院でのCOVID-19妊婦への対応策については、関連各科医師、助産師、看護師など多職種によるカンファレンスを経て方針決定を行っている。現在、妊婦も含めた一般の方のワクチン接種普及も進んできてはいるものの、今後第6波の襲来も予測されるため引き続きの感染対策は必須であり、対応策の見直し等は必要だと思われる。

10. 帝王切開後に感染性心内膜炎による急性心不全を合併した一症例

循環器内科

山田 智史 藤尾 栄起
西村 侑太 松本 晶子
飛田 諭志 寺西 仁
幡中 邦彦 向原 直木

心臓血管外科

金光 仁志 毛利 亮

【主訴】

呼吸困難

【現病歴】

30代女性。前期破水と絨毛膜羊膜炎疑いのため当院産婦人科に母体搬送され、入院2日目に緊急帝王切開施行した。術後SpO2低下、胸部レントゲンにて両肺野の透過性低下、労作時呼吸困難を認めためたため当科に紹介となった。

【臨床経過】

ベッドサイドでの経胸壁心臓超音波検査で